

しめのひとこと

志免町のいろんなひと、いろんなことをお伝えします！

17

地域で支える 更生保護とは

保護司の活動

糟屋保護区保護司会

かたやま ほくじ
保護司 片山 牧二(志免支部 支部長)

「保護司」とは、犯罪や非行をした人の立ち直りを地域で支える民間のボランティアです。保護司法に基づき、法務大臣から委嘱された「非常勤の国家公務員」ですが、報酬はありません。

民間人として地域社会の中で、犯罪や非行をした人たちの立ち直りの援助、指導、助言を行うと共に、犯罪や非行に関する予防運動も行い、更生保護行政の重要な役割を担っています。



保護司の先輩に誘われて活動へ 9年目を迎え志免支部長に

私は山口県出身で、大学進学時に福岡県で暮らすようになりました。志免町には、昭和48年に転入したので、もう49年住んでいます。

転入当時、志免町に骨を埋めるなら地域の友人を作ったほうが良いだろうと思って、そのころ盛んだった大人の野球クラブチームに入りました。

スポーツを通じて、知り合う人が増え、人脈が広がり、友人関係が豊かになっていきました。

保護司の活動をするきっかけは、先輩保護司の方から「片山君に向いているよ」と声をかけられたことです。保護司になれるのは65歳までということと、人に誘われたり推薦されるのも何かのご縁だと考えて、平成26年3月に入会しました。

保護司歴で言えば、若くても長く活動されている先生（保護司はお互いを先生と呼ぶ）もいますが、保護司も、高齢化や担い手不足が指摘されている昨今、年齢の高い順に引き受けないと後々困るでしょうと話し合っ、志免支部長を引き受けました。

観察官と一緒に対象者の立ち直りを支援し、地域にも働きかける

保護司の活動は、ボランティアとして地域社会の中で過ちに陥った人や非行に走った人、執行猶予付き保護観察者（下線部はすべて対象者と呼ぶ）と、ひと月に2回程度面接をし、対象者が遵守事項を守っているか、困りごとはないかなどを確認、援助及び指導・助言を行い、一人一人に対して毎月報告書を作成し、福岡保護観察所の保護観察官に報告しています。

組織としては、法務省保護局の福岡保護観察所に所属する糟屋保護区保護司会の志免支部に保護司として所属して活動しています。支部では、毎月1回の会議と、毎年7月1日から「社会を明るくする運動」に力を入れて取り組んでいます。また年に2回の防犯パトロールや、支部独自の施設研修なども行っています。一般にはあまり知られていませんが、犯罪や非行の予防に関する運動なども行っており、更生保護行政の重要な役割を担っています。また、地域の更生保護女性会と共に行動しています。



社会を明るくする運動（7月）



保護司の活動を広く伝えたい。 女性の保護司を増やしたい

現在、志免支部では12名の保護司が活動しています。年代は40代から70代です。来年度には13名になります。世代交代も順調で、人数は足りていますが、対象者は男性ばかりではないですから、女性の保護司が増えて欲しいと考えています。日本全体では、保護司の人材不足が深刻です。国は各支部で対策本部を立てて取り組むべき問題だと言っています。人材不足は、保護司の活動を知る人が少ないのも原因の一つだと思いますので、今回の取材も保護司の活動について、志免町の方にもっと知っていただく機会になると思い引き受けました。



犯罪の初犯は減少しているが、再犯者は減っていない現状

対象者は覚せい剤使用者が多いです。また20歳未満を青少年といますが、保護観察が必要になった青少年を担当することも多いですね。立ち直すには時間がかかるのも事実です。犯罪の初犯は減っていますが再犯者は減っていません。須恵町に「恵辰会」という刑務所から出てきた男性を預かり、雇用先を見つけ自立に向けて、反省を促しながら生活の基盤を整える指導をする施設がありますが、身元を引き受ける家族がない対象者などは、そこで生活しながら指導を受けています。

保護司として、対象者とは月に2回程度面接をします。私は自宅で面接しています。公共施設やどこかの公園で面接する場合もあります。「会って、話す」のが基本です。対象者ごとに遵守事項を守っているかを確認しますが、時間を決めて約束しても守

らない人が多いです。私は青少年担当が多いですが、そんな時は、叱ってもしようがない。ダメダメばかり言う大人には心を開いてくれないですから。

対象者とは「あなたの気持ちはわかるよ」と態度で表しながら素のまま接し、辛抱強く次の約束をして、面接を重ねます。ひどい人は「寝てた」「忘れてた」などいろいろ言い訳を言いますよ。それも含めて保護司は報告書に書きます。電話の回数や、往訪（保護司の訪問）、来訪（対象者の訪問）も記録していきます。万引きや性犯罪、青少年非行、飲酒運転など過ちを犯した人でも、面接を重ねて、心を開いて話せるようになると、社会に貢献する人材になっていくのを何度も見てきました。他人に迷惑をかけたらいかんけど、迷惑をかけてきた人が更生する、成長していくのがわかるのが、保護司として最もうれしい瞬間ですね。



子どものうちに、たくさんの大人と関わる。地域の力の重要性

対象者の記録を見ていて、子どもの時から好き勝手に生活し、自分で立ち直る力がないから再犯者になるのかなと思うことがあります。

私は町内会長として、地域の子もたちとも関わっていますが、子どものうちから地域の活動やスポーツ団体などに参加し、まずは挨拶ができる子に育てる必要があるのではないかと感じます。青少年に罪はなく、親だけより、地域の大人もしっかりと関わり、愛情をもって見守り育てれば、非行や犯罪につながる人は減り、再犯率も下がると思います。

今後は、地域や近所のつながり、人間関係をもう一度結びなおす、人と人との関わりを作り出せるような活動にも取り組みたいですね。



取材を終えて

民間のボランティアとして活動する保護司だからこそ、対象者が心を開き更生していく。地域の大人が「大丈夫だよ」と立ち直りを支える「更生保護」の重要性を知りました。また、保護司や町内会長の活動を通じ、人間関係の大切さを日々感じている片山さんのお話は、町全体の課題の様に感じました。

